

## 日本における wetland としてのカキ礁生態系の現状と価値

\*山下博由（貝類多様性研究所）・森 敬介（国立水俣病総合研究センター）・佐藤慎一（東北大学総合学術博物館）・池口明子（横浜国立大学）・伊藤恵子（日本湿地ネットワーク）・牛野くみ子（千葉県自然保護連合）

カキ礁は、内湾や河口域に発達し、マガキなどのカキが層状に積み重なって発達した礁である。カキ礁は「温帯域のサンゴ礁」とも呼ばれ、水質浄化・生物多様性の支持など、海洋生態系において重要な役割を担うことが知られている。日本には各地にカキ礁が存在するが、正確な分布・現状は明らかになっていない。そのため、全国のカキ礁の調査を行った。これまでに、北海道、東北、関東、九州、沖縄、韓国の 70 地点以上で現地調査を行ない、25 地点でカキ礁を確認し、13 地点で詳細な調査を行った。未確認情報も含めると、日本には 35～40 地点以上のカキ礁成立地があると考えられる。これまでの調査で、東京湾、瀬戸内海、博多湾、唐津湾、伊万里湾、有明海、不知火海に大規模なカキ礁が存在することが確認された。通常のカキ礁はマガキで構成され、「リレー戦略」と呼ばれる発達方法によって礁を形成するが、有明海・不知火海のカキ礁ではマガキ、シカメガキ、スミノエガキが混生しており、優占種であるシカメガキが堆積することによって形成されている礁が存在することが確認された。日本のカキ礁には、「リレー型」と「堆積型」、及びその中間的な「混合型」のカキ礁があることが確認された。日本は、地球規模で見てもカキ礁が豊富な地域に属し、様々なタイプのカキ礁が存在することが明らかになった。カキ礁生態系は、海洋生態系の豊かさや生物多様性を支持する他、漁業利用や環境教育への利用価値も有している。我が国では、その価値が十分に認識されているとは言い難いため、まず第一にカキ礁生態系を wetland のタイプあるいは構成要素の一つとして認識することが必要である。